

2021年  
8月

## マナ通信



今月のマナ通信は、

- ◎6月の聖書日課（テトスへの手紙、ピレモンへの手紙、列王記第1・第2）
- ◎土・日曜日の学び（荒野の旅）からの感想です。

**パン**裂きについて書いてみたいと思います。集会では欠かさずこの事が行われますが、我々クリスチャンにとっては救いの原点だと思っています。最後の晩餐で主は云われました。

「感謝の祈りをささげた後それを裂き、こう言われました。「これはあなたがたのための、わたしのからだです。わたしを覚えて、これを行いなさい。」 食事の後、同じように杯を取って言われました。「この杯は、わたしの血による新しい契約です。飲むたびに、わたしを覚えて、これを行いなさい。」ですから、あなたがたは、このパンを食べ、杯を飲むたびに、主が来られるまで主の死を告げ知らせるのです。」（Ⅰコリント11:24-26）

イエス様は12弟子たちと食卓を囲みこう言われましたが、その時、弟子たちのうちでこのことを理解出来ている人は一人もいませんでした。なぜなら、数時間後イエスは、ムチ打たれ、イバラの冠をかぶせられ、十字架にかかりますが、その時、だれも側にいませんでした。ただ一人ペテロが中庭でその成り行きを見守っていただけだったのです。

イエスは云われます。わたしは、あなた方の罪の贖いのため、十字架で死にます。人間の罪を取り除くため、わたしが代表し死ぬしか方法は無いのです。

聖餐式では皿に入れられ焼かれたパンが皿の上で指で押されると、四方にひび割れ砕かれます。それから分配されます。イエスのからだは砕かれたのです。私たちの為に死んで下さったのですから、私たちも一緒にイエス様と死んだのです。しっかりと胸に抱えられて死んだのです。罪ある自分は死んだのです。

次いで、イエス様は言われました。この杯はわたしの血による新しい契約です。これからは世の中が変わるのですよ！ 全てが新しくなり、新しい支配の下であなた方は恵みを受けるのですよ。なぜなら、モーセを通して神がわたし達に与えられた律法は誰も守ることが出来ず、義と認められることはありませんでした。律法は我々の養育係だったのです。

ならばどうすれば良いか！ 罪から義に替わるにはどうすればよいか。愛ある神は考えて下さったのです。それはやはり十字架で血を流し死んで下さることでした。旧約時代には聖所入る時、動物の血によって聖められて至聖所で神と交わりを持ちました。

しかし、主が十字架で死なれた後は、我々はイエスの血によって聖められ神との交わりを持つことが出来るようになったのです。方式が変わったのです。夜、ランプの灯火によって生活していたのが今日では電気の光によっての生活に変わったのと同じです。

パン裂きの大きな目的は、主は何の為に、十字架にかかれたのか、全てが我々の罪の為に。愛ある神は「我々の罪の身代わりとなって十字架で死んで下さったのです。」

最後にパン裂きに関して前日から準備をして下さいます三弥子姉妹の労に対して感謝します。お皿、コップを集会所まで運ぶのも大変です。片付けも大変です。恵みが、こう言う奉仕の下に成り立っていることを知らない訳にはいきません。だが、本人はそれ程、苦痛に思っていないのかも知れませんね。（畑中伸之）

**主**は次のように約束されました。「わたしが去って行くことは、あなたがたの益になるのです。去って行かなければ、あなたがたのところに助け主はおいでになりません。でも、行けば、わたしはあなたがたのところに助け主を遣わします。その方が来ると、罪について、義について、さばきについて、世の誤りを明らかになさいます。」（ヨハネ16:7-8）

ロマ8章16節の学びでは、御霊（助け主）の神の働きが述べられていて、御霊のバプテスマを体験できると約束されています。体験させて下さるのは神の御心によるもので、私は信仰には信仰を積み重ねてゆかねばなりません。そして、絶えず祈り続け、神の御霊が私たちをとらえて下さるまで求め続けなければなりません。

新生によって御霊様が心に内住して下さったので喜びで一杯です。御霊様のお働きによって心は満たされています。解らないことはお頼みすると必ず答えて下さる。なんと感謝なことでしょう。自分の為でなく主の御栄光の為に御霊様の力を求めます。主に感謝します。（畑中千恵子）

**ア**ハブがエリヤに「おまえは私をみつけたのか、我が敵よ」と言うと、エリヤは答えた。「そうだ。あなたが主の目に悪であることを行うことに身を任せたので、みつけたのだ。」（Ⅰ列王記21:20）

イスラエルの王アハブは、イズレエルの宮殿のそばにあるナボテのブドウ畑がほしくて譲ってくれるようにナボテに頼みますが、断られます。当時のユダヤ人にとってありえない申し出です。先祖伝来の土地を売り渡すことは禁じられていました、とあります。

また、十戒には申命記5章21節に隣人の持ち物を欲しがったり、持ち主を妬んで（<sup>ねた</sup>）はならないとあります。

アハブは欲しがったのです。そして妃イゼベルの悪巧みによってナボテを殺してしまいました。アハブははじめそこまでは考えていなかったかもしれませんが、アハブの欲の結果そのようになってしまいました。他人のものを欲しがる妬みを持つということは恐ろしい結果になることを教えられ、自分の心をよく見張って主に守っていただきたいと強く思いました。

アハブはエリヤから神の裁きがあることを告げられて、なんとへりくだり、悔い改めの態度を見せます。〈みことばを味わおう〉に書かれてありましたように、好き放題をしておいて、今頃になって悔い改めとは甘すぎる、遅すぎると思います。しかもアハブの悔い改めが真実かどうかとまで言われています。ところがここに想定外のことが続きます。

29節で、神様は「アハブがわたしの前にへりくだっているのを見たか。あんなにまでしているので、王が生きている間、わたしの誓ったことは実行しないことにする。……」とおっしゃいました。

私は、自分の罪深さと、イエス様にあって罪赦されたものでありますことを忘れて、アハブが深く悔い改めたとしても赦してはいけないと思ってしまう者です。神様のご愛を何もわかっていない……。

「主は、私たちの罪にしたがって私たちを扱うことをせず、私たちの咎にしたがって私たちに報いをされることもされない」（詩篇103:10）

主は慈しみ深いとありますが、私の上にも主の慈しみがありますことを感謝します。（福島三弥子）

**列**王記Ⅰ・Ⅱを読んでいると、戦の連続でしかも結構残酷なので、辟易（<sup>へきえき</sup>）します。

王の名前も似たようなものあり、舌を噛みそうなものありで、注解書や地図、王と預言者の年代記を見ながら読みました。新たな発見とともに二千年以上前の遠く離れた地の人間も今の人間と感情の動きは、そう違いがないと、発見しました。進歩がないとも言えるでしょうか。

ゲハジの件（Ⅱ列王5:27）とか、あのエリヤのまさかのプッツンの場面も、共感が沸いてしまいます。「しかし火の後に、かすかな細い声があった。」（Ⅱ列王19:12）に、主のきめ細やかな愛に、目を見張りました。

まず静まって主の声を聴くことの、必要と大切さを、教えていただきました。（広瀬裕子）



### ☒ ハネの黙示録21・22章

日々の生活のなかで、一時的に再臨のことを意識することはあってもじっくり考えることは少ないとあらためて感じました。

黙示録は、何度読んでも難解でどうしても敬遠してしまいましたが、今回はほんの少しだけキリストの再臨によってもたらされる真の喜び・恵みに心を向けて読むことができたかなと思います。

主の再臨を恐れるのではなく、「来てください」と主を待ち望む者としていただきたいです。

(栗原智恵子)

☒ のとき、彼のしもべたちが近づいて彼に言った。「わが父よ。難しいことを、あの預言者があなたに命じたのでしたら、あなたはきっとそれをなされたではありませんか。……」

(Ⅱ列王記5:13-19)

「みことばを味わおう」にあります。ナアマンには次のような奇跡の予想がありました。「彼がきっと出て来て立ち、彼の神、主の名を呼んで、この患部の上で手を動かし、ツアラアトに冒されたこの者を治してくれると思っていた。」(同11節)

でも実際には、預言者エリシャの使いの者からヨルダン川で身を洗うように言われただけでした。ナアマンは怒りましたが、結局言われた通りにしてツアラアトが消えました。そうして彼はイスラエルの神、主のみわざを知ったのです。

自分の予測の範囲内で考えることしかできない人間とは違い、神様は全知全能です。そして人間の心の内を全て把握しておられます。

私たちは自分の知恵で主を知ることができません。神の知恵は「信じる」なら、救いを受け取れるというものです。今自分が与えられている「イエス様を信じている」という事実をより確信に導くために、学びを深めていくことが大切であると思いました。(永井亮子)

☒ はあなたの愛によって多くの喜びと慰めを得ました。それは、兄弟よ、あなたによって聖徒たちが安心を得たからです。」(ピレモン7節)

このピレモンへの手紙は、パウロの手紙の中でも最も個人的なもので、25節という短い書簡です。しかし、パウロのオネシモへの愛の深さと、ピレモンに熱心に懇願するパウロの姿勢を、伺い知ることができます。

私たちは、今、コロナ禍の只中であっても、神様に愛され、守られて、そして、導かれていることを覚えて感謝します。(外處トミ)

神様と 主イエスの愛に 守られて  
日々歩めるは 何たる幸ぞ

2021年6月30日

☒ 人ひとり、いやいやながらでなく、強いられてでもなく、心で決めたとおりにしなさい。神は、喜んで与える人を愛してくださるのです。」(Ⅱコリント9:7)

神様が与えてくださる多くの恵みに感謝します。神様に喜ばれる日々を送ることができるよう、いつも主に目を向けて歩いていけたら幸いです。(外處結実)



群馬県の下仁田あじさい園

☒ の町とそこにあるすべてのものは主のために聖絶せよ。……あなたがたは聖絶のものには手を出すな。」(ヨシュア6:8)

アハブ王は、神の預言者エリヤから悪い行いに対する戒めを聞いて一旦は悔い改めたかのように見えたが、結局、偶像礼拝、バアル信仰等の神様の忌み嫌われるものから離れることが無かったので、王と同じ罪を犯していたエリコの町と共に聖絶されました。

マナの解説には、「聖絶」とは神のご意思によってすべてが滅ぼし尽くされることですが、むしろ神がご自分のものとして取り分けて(人間が自分の利益のために私服することを許さない)、ご自分のきよさにふさわしくきよめる(聖化)ために行うためであり、その教訓としては、私たちは神のご意思に従って自分の役割を忠実に果たすこと、人生の勝利の栄光は自分にはなく神にお返しするべきこと、そして罪と悪の世界であっても、神に信頼する者は祝福を受けると書いてありました。

私もかつてはこの世の成功や成果を求め、自分の楽しみや趣味で多くのものを集めましたが、定年まで1年足らずの年になった今、もうこの世で追い求めるものは無く、欲しいものもあまり無く、与えられたもので満足するようにとの御言葉が実際になってきました。

それよりも、今は聖霊様の満たしや聖霊のバプテスマ、そして何より携拳もしくはパラダイスのことが気になってくるようになりました。

そして、主のお導きに対してもっと敏感となり、従うことができるようになりたいと改めて思うようになりました。

神様は、いろいろな導きを通じて、私の中のエリコを聖絶されようとされており、私が聖になることが御心であることを示して下さいます。

もし、私が生きていた間に携拳があったなら、私は何一つ持たずに、空中で主にお会いするので。その時、それまでこの世に自分のために蓄えてきた全てのものは、ただの邪魔な足かせに過ぎなかったことが明確になり、それらが神様の御国に入る前に聖絶される時が来るのです。

ですから、これからは神様の御心をはっきりと知ることができるように御霊で満たしていただ



るように祈り求め、そして御霊に導いていただきながら歩み、少しでも多く天に宝を積めるようにしたいと願います。(外處徳昭)

**実**は、反抗的な者、無益な話をする者、人を惑わす者が多くいます。特に、割礼を受けている人々の中に多くいます。そのような者たちの口は封じなければなりません。彼らは、恥すべき利益を得るために、教えるはならないことを教え、いくつかの家庭をことごとく破壊しています。クレタ人のうちの一人、彼ら自身の預言者が言いました。「クレタ人はいつも嘘つき、悪い獣、怠け者の大食漢。」この証言は本当です。

ですから、彼らを厳しく戒めて、その信仰を健全にし、ユダヤ人の作り話や、真理に背を向けている人たちの戒めに、心を奪われないようにさせなさい。」(テトス1:10-14)

初期の教会には、「御霊の自由」がありました。人々は、聖霊によって導かれるままに、自由に集会にあずかることができました。パウロは、このような開かれた集会のことを第1コリント14章26節で次のように述べています。

「それでは、兄弟たち、どうすればよいのでしょうか。あなたがたが集まるときには、それぞれが賛美したり、教えたり、啓示を告げたり、異言を話したり、解き明かしたりすることができます。そのすべてのことを、成長に役立てるためにしなさい。」

このように、神の御霊が集会の様々な信者たちを通して自由に語ることが、理想的な状態です。しかし、人間の本性が堕落したものであるがために、そのような自由が存在するところには、必ずと言ってよいほど、「すぐに立ち上がって、その自由を乱用する人たち」が出てくるものです。

彼らは、間違った教えを説いたり、人の徳を高めない、つまらないあら探しをしたり、御霊の導きとは無関係の、とりとめもない話を延々としゃべり続けたりするのです。



このようなことがクレタ(クレテ)の集会で起こっていたようです。パウロは、このような乱用を取り締まり、御霊の自由を保つために、強い霊的指導者が必要であることを悟りました。

また、十分に資格のある長老たちを任命する際にも、細心の注意を払わなければならないことも悟りました。それで彼は、各地の集会に長老たちを早急に任命しなければならなくなった状況を、ここで詳しく述べています。

使徒たちの権威に異議を唱え、彼らの教えを否定するために、多くの反抗的な者たちがすでに立ち上がっていました。彼らは、「空論に走る者」、「人を惑わす者」でもありました。彼らの話は何一つ霊的な利益をもたらしませんでした。それどころか、人々から真理を奪い、彼らを誤りへと導きました。

先頭に立って騒ぎを起こしていたのは、「割礼を受けた人々」、クリスチャンであると公言しながら、「クリスチャンは、割礼を受けて、儀式律法を守らなければならない」と主張していたユダヤ人教師たちでありました。これは、キリストのみわざが十分なものであったことを、事実上否定するものです。

そのような者たちの口を封じなければなりません。彼らは、教会の集会は民主主義ではないということ、言論の自由には制限があることを学ばなければなりません。

彼らは家庭を破壊させていました。これは、彼らが家々でこっそりと有害な教えをばらまいていたことを示しているようです。これはカルト宗教が得意とする方法です(Ⅱテモテ3:6)。

彼らの動機も問題です。彼らは金銭を得ようと躍起になっていました。そして、金になる仕事をするための隠れ蓑として、その務めを利用していました。人の性質には律法主義的なところがあり、彼らの使信はそれに訴えるものでした。

「たとえ自分の生活が堕落した汚れたものであっても、宗教的な活動することによって神の恩寵を得ることができる」と信じ込ませようとしたのです。

ここでパウロは、自分がどんな種類の人々を扱っているのかをテトスに告げています。これほど率直で辛らつな表現は、特ににせ教師たちに当てはまるものでしたが、同時に、一般の「クレタ人」にも当てはまるものでした。パウロは、エピメニデス(紀元前600年頃の賢人のひとり、彼自身もクレタ人であった)のことばを引用し、クレタ人のことを常習的な「嘘つき、悪い獣、怠け者の大食漢」と呼んでいます。

どの国の民にもそれぞれ特有の特質がありますが、その堕落や悪行の程度において、クレタ人にまさる民はほとんどいなかったようです。彼らは、「うそ」をついてばかりいる者たち、「うそ」をつかすにはいられない者たちであったようです。獰猛な動物たちのように、下品な野蛮な欲望のままに生きていました。仕事が大嫌いで、霊的なことにも全く関心がなく、暴飲暴食にふけるためだけに生きていたようです。

パウロは、この性格描写・証言は本当です、と言っています。テトスは、あまり見込みのない「性格の悪い人々」に対しても働きかけなければならませんでした。

パウロは、テトスに、その人々を見捨てるように助言したりはしませんでした。なぜなら、最悪の人々にも、福音を通して変えられる見込みがあるからです。

彼らは、いつの日か、模範的な信者になるかもしれないし、そればかりか、敬虔な長老になるかもしれないのです。人々の下品さ、頭の鈍さ、鈍感さの向こうには、彼らが親切で清純な、実りの多い聖徒になる見込みが常にあるのです。

なんと感謝なことでしょう。福音には、クレタ人のような私をも造り変える力があるのです。  
(福島勲)

貴重なご感想をありがとうございました。  
次回はマナ7月号の感想を8月10日頃までに福島兄弟へお寄せ下さい。(永井)